

西成拠点 ブレーカープロジェクトの20年



2003年、大阪・新世界を拠点に市の文化事業として始まった「ブレーカープロジェクト(BP)」。
隣接する西成区に活動の軸を移し、22年度から区の事業になったが、社会とアートをつなぐという
理念は20年目の今も変わらない。発足時からディレクターを務める雨森信さんは「まちとの関わり
を丁寧につくる中で課題が次の活動を生み、今につながっている」と語る。

陶芸や畑 アートと地域結ぶ

地下鉄花園町駅から東へ5分ほど歩くと「作業場」という木製看板が見えてくる。15年3月に廃校になった旧市立今宮小の校庭。囲いは「コップやお皿を作っています」「栄養満点な野菜がいっぱい」などと書かれた看板でにぎわう。「廃材を利用して地域の人と作ったもの」と雨森さん。

「作業場」はBPの「創造活動拠点」として月1〜2回、オープンしている。美術家のきむらとしろうじんじんさんを中心に15年から始めたプロジェクトだ。かつての体育倉庫や学習園を開放し、集まった人は陶芸や畑作業などを思い思いに楽しむ。

取材の日、親子で訪れていた牧千尋さんは「家も近所で気軽に来られる」と半年前から毎月のように通う。10歳の息子、波音さんも「粘土で遊ぶのが楽しい」と笑顔だ。雨森さんは「お客さんを迎えるというやり、来た人と一緒にこの場所をつくらうという思いで始めました」と説明する。

まちに深く入り込み、「参加」ではない双方向の「関わり」を大事にする。BPの活動を貫くこの信念は、発足当初行ったアーティストたちとの実践が大きく影響しているという。たとえば、伊達伸明さんとのプロジェクト「ウクレレと歌」留多で語る新世界では、半年以上かけて新世界の店舗や住宅約60軒を取材。建物の歴史や思い出を住人から聞き取り、カルタの読み札を作った。そこには「異なる価値観の者同士がアートを媒介に出会っていくとい

関わり合って未来への視点を



▲旧今宮小の校庭だった作業場。に集まり、みんなで育てた野菜を美術家のきむらとしろうじんじんさん(右)と調理する人たち。2021年3月14日、草本利枝さん撮影(フレイカープロジェクト提供) ▶地域の女性たちによるプロジェクトが並ぶ「iokku」手芸館『たんす』で、プロジェクトの20年を振り返るディレクターの雨森信さん(清水有香撮影(いずれも大阪市西成区))



雨森さんは面白さを感じたと振り返る。「個別の現場やアーティストを大切にし、その魅力を携えて丁寧にまちに入っていく姿にシンパシーを感じる」。BPについてそう語るきむらさんも最初期の04年から関わる。屋台で移動しながら茶わんを焼き、訪れた人とお茶を楽しむ「野点」を新世界や西成で開催。場所探しから始まる「野点」は、路上を歩きながら候補地を挙げ、その土地の持ち主との交渉や相談の過程で地域や人とのつながりを育む。

野点の現場には「茶わんに絵付けする人や僕と記念撮影だけして帰る人、やじ馬みたいな人もいて、いろんな時間が流れている。社会的な意義や意味で困り込まず、魅力があったら立ち寄るし、つまらんとしたら立ち去る、そういう状態が『ええ風景やな』と思う」ときむらさん。「作業場」はこの「ええ風景」をよりどころに生まれた。「『ええ作業』の魅力」がまずあって、動機も意義も問わず入り口を開けておく。そんな「空きの地的な有りよう」が理想だ。

BPは雨森さん以外に事務局スタッフが2人。発足以降さまざまな場へ繰り出し、一時的な「仮設の現場」を生みだしてきたが、この10年間で「作業場」のような「常設の拠点」をつくる実験を重ねてきた。それはプロジェクトを継続していく上で必然でもあった。アートプロジェクトの持続可能性を考える上で「お金の問題」も重要だ。BPの活動に対する市の予算は昨年度約300万円。それも年々減少傾向にあるという。「予算に左右されず継続するための道」として18年春、活動拠点の一つ「iokku手芸館たんす」の運営を一般社団法人に引き継いだ。「たんす」ではプロジェクトに関わっていた70〜80代の女性を中心に、得意の針仕事を生かしたオリジナルプロジェクトの制作が今も続く。

BPが目指す着地点は「図書館のように、小さな創造活動拠点が地域のあちこちにある」イメージだ。という。「それを制度につなげないと継続していくのは難しいだろうし、担い手も育ちにくい」と課題も挙げられる。再開発が進み、変わりゆく景色を体感しながら雨森さんは思う。「一人一人がどういう未来や社会をつくるのかをイメージできないければ、社会もまちづくりもない。さまざまな視点を考えるアートは、その思考を誘発するきっかけになる」

清水有香

アートプロデューサー・大阪電気通信大教授 原久子さん

暮らしの知恵を共有



活動そのものを重視するアートプロジェクトは90年代半ばごろから国内で同時多発的に生まれました。背景の一つには80年代以降、全国各地に美術館が整備されていった中で、ハードからソフトへという自然な流れができたことがあります。

BPはアートの理論だけではない、リアルな社会との接点をうまく取り入れているのが特徴です。関わっている人が当事者としての主体性を持っていないと成立しないのもBPならではの、地域の人が暮らしの中で培ってきた知恵や経験を互いに共有することで、プロジェクトが成り立っている面もあるようです。

そういう実践を少ないスタッフで20年やり続けるのは奇跡的に思えます。それはBPの「参加者」というより「メンバー」である地域の人や、その連携がうまくいっているからでしょう。アートプロジェクト自体、コミュニケーションを促すもので、BPにはそれが効果的に表れているように感じます。

次回は7月2日掲載